

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2021 No.33・34
合併号

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

再考、初年次教育… 1 第35回 初年次教育セミナー… 2 LSCドキュメンタリーアワー報告… 4 ドキュメンタリーアワー 参加者アンケート紹介… 5
第11回 教育力アップセミナー… 6 ありのままの自分で語れる場 よこそ修大ディベートクラブへ！… 7 学生たちの学び… 8
LSC資料紹介… 11 <学び★サブリ>出会い直しの読書・大学教育学会 2021年度課題研究集会参加報告… 12

再考、初年次教育

○ 学習支援センター長 森河 亮

初 年次教育（導入教育と呼ばれることもある）は1970年代にアメリカの高等教育機関で導入され、その後、日本でも1991年の大学設置基準の大綱化以降、多くの大学が採用している。本学でも2007年度から「ファーストイヤー・セミナー」という科目を開講し、初年次教育を導入した。学習内容は「大学で学ぶ意義」「ノートテイキング」「図書館の利用法・情報検索スキル」「人間関係スキル」「キャリアデザイン」などであった。現在は「修大基礎講座」と科目名を変更し、その都度、その年度の状況に合わせて学習内容を微修正しながら実施してきた。2007年度に初めて初年次教育を実施してから15年が経過し、本学で2024年度にカリキュラム変更がなされるタイミングで、初年次教育を再考する必要があると感じている。

新 高等学校学習指導要領等は令和4年度から年次進行で実施され、平成31年度から一部を移行措置として先行して実施されている。これによると、情報教育では「統計処理やビッグデータの解析などの情報の活用、プログラミング、モデル化とシミュレーション、情報デザインの適用などの情報技術の活用」また「個人情報保護に関する法律、知的財産に関する法律、サイバー犯罪の防止に関する法律など、情報や権利の保護と活用に関するもの、犯罪に関するものなど、マナーも含めてその意義を理解する。」などと記載されている。本学でも初年次教育として情報教育を行っているが、その学習の中身は基本的なコンピュータ・ネットワークリテラシーの習得と資格取得を目的とした文書作成（Word）、表計算（Excel）などの基礎的技能および知識の習得である。これを見ると、高等学校で学習する内容の方が高度なものである可能性があり、また情報に関するマナー等においては重複している内容である。このことから考えると、そもそも大学の初年次教育において情報

教育そのものが必要なのかどうか、から検討する必要があるであろう。もし初年次教育に情報教育を組み入れるなら、各学科の専門科目と結び付け、各学科特有に扱う数値やデータに関する知識や技能を修得する主専攻科目の基礎科目として開講するような形態が相応しいのではないだろうか。

また新高等学校学習指導要領等では、「生徒が、学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力を身に付けていくことができるよう、特別活動を要としつつ各教科・科目等の特質に応じて、キャリア教育の充実を図る。」としている。本学では、修大基礎講座の科目内で「キャリア」について扱っており、この内容を高等学校で実施されていることを踏まえ、検討する必要があるであろう。

さらに新高等学校学習指導要領等では、各教科に共通して「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う」よう求めている。この流れから考えると、これからの大学生はすでにアクティブ・ラーニングの手法に代表されるような能動的な学習を高等学校で経験済みであり、大学ではその学習との関連性やその学習をより深化させるような取り組みが求められるのではないだろうか。

上 述のことを踏まえ、本学の初年次教育に必要なことは何かを考えると、現時点での学習内容は検証することはできるであろうが、将来的には今後の高等学校での学習内容や本学のディプロマポリシーの改定などを踏まえ、いったん決めたそれも変更・修正することが必要になるであろう。ただし、いくら高等学校学習指導要領等や本学のディプロマポリシーが改定されようと、「自校教育」に関わる内容は削除してはいけなと考える。本学は「私立大学」である。それゆえ、本学の存在意義、本学で学ぶ意味、建学の精神、などを新入生に理解させることは必須であろう。これらを理解したうえで、誇りを持って本学で学び、社会に巣立って活躍してほしいと切に願う。

初年次教育セミナー

第35回 初年次教育セミナー

学習支援センター次長 新本 寛之

2020年度初年次教育セミナーは新型コロナウイルスの影響でやむ無く開催を断念することとなりました。2021年度もコロナ禍にありましたが、皆様のご理解ならびにご協力のおかげをもちましてオンラインにて開催を実現することができました。お忙しい中、ご参加いただきました教職員の皆様に深くお礼申し上げます(参加教員12名、職員5名)。

さて、今年度は統一テーマを「学生が自律的に学ぶために」と設定しました。普遍的なテーマではありますが、現在学生が直面するオンライン授業というこれまでと異なる学習環境の中においても、自律的に学びを進めてほしい、それを促すヒントを得たいという思いが背景にあります。講師として、自律学習研究がご専門の崇城大学総合教育センター SILC 准教授の宝来華代子先生をお招きしました。タイトルは「自律的な学修者の育成に向けて～スキル活用の対話を通し学生の主体性を促進しよう～」です。オンライン実施という制限下にも関わらず、ペアワークを導入した参加型方式を実践していただきました。宝来先生のご快諾かつ柔軟なご対応に心より感謝申し上げます。

以下、セミナーの内容の中からすぐに活用できる知識・スキルについて2点ご紹介します。一つ目ですが、目指すべき理想的な自律学修者について、次の9つに定義されました。

- ①自分の目標が明確である。
- ②目標に向かって学修を管理できる。
- ③学び方(学習方略)を知っている。
- ④深く、多面的に物事を考えることができる。
- ⑤自分の行動や選択を振り返り、必要な自己調整を加えることができる。
- ⑥自分に適切な学習リソースを判断し、選択することができる。
- ⑦問題解決に向け必要な学習リソースを活用できる。
- ⑧自発的積極的に自分で責任をもって能動的に行動できる。
- ⑨考え方がポジティブでモチベーションがある。

筆者はこれらを自律学修のプロセスとして、学生にまずは提示する機会を持ちたいと考えます。過去に実践できているゼミ生が存在するので、その取り組み事例を項目ごとに紹介して、頭の中に自律学修者の理想像を描いてもらいます。加えて、社会に出ても必要なプロセスであることを訴えてモチベーションを刺激します。その理解の上で、学

生は目標を設定しプロセスを進めます。目標設定後は「他律学修」にならないようファシリテーターに徹し、学生が自身のプロセスを俯瞰して分析できるようサポートに努めます。

続いて、その「自律学修」を促す効果的なアドバイジング手法について下記の通りご教示いただきました。

4つの注意点……傾聴、観察、問いかけ、笑顔

4つのテクニック…あいづち、うなずき、ミラーリング、アイコンタクト

4つのスキル……繰り返し、言い換え、共感、褒める

何となく実践している項目もありますが、3つに整理ならびに非言語と言語によるコミュニケーションの関係性を解説いただいたことで、今後それぞれの効果を意識して学生と対話できます。その中で、早速試してみようと思ったのがミラーリングと繰り返しです。個人的にこれまで意識したことがない手法です。ミラーリングは相談者の姿勢や動作をさりげなく真似るのですが、動作の場合2秒程度遅らせることが効果的とのこと。一方、繰り返しは相談者の言葉をそのままあるいはキーフレーズを選んで繰り返します。声のトーンも相手の感情に合わせることもポイントのようです。これら2つの手法は初対面者との相談の際に相互の信頼度を深める効果を期待できます。信頼関係なくして相談内容を深掘りすることは難しいと常々感じているので有用です。

のたびのセミナーを通じて、自律学修者の育成に係る最新かつ多くの知識やスキルを学ぶことができました。今後、学生の言葉を真摯に傾聴する中で信頼関係を醸成し、自律学習に結びつけるための手法として、積極的に活用したいと考えます。



自律的学習 を支援する ファシリテーターとしての教員

参加者
からの声

法学部准教授 伊藤 嘉亮



自ら、自分が何を勉強したいのかを発見し、学習目標を設定し、必要な資料を収集・整理し、適切な学習方法を計画・実践して、その成果を評価することができる学生（自律的な学習者）ばかりなら、大学の教員にとってこれほど嬉しい（楽

な？）ことはない。とりわけ、オンデマンド授業が行われるようになった昨今においては、学生が自らスケジュールを管理し、計画的に学習を進めることが求められるようになったといえる。しかし、多くの学生はそうではないだろう。つつい視聴すべき講義をためてしまい、学期末に慌てて勉強し出す学生も多いのではないだろうか。

もっとも、今まで自律的な学習をしたことのない学生が、大学に入学した途端、急に自律的な学びを実践できるようになるわけではない。学習に自ら向き合う意志や能力は、様々な活動を通じて、徐々に身に付けていくものである。他律的な学習にとどまっている学生らの態度にただただ悲観するのではなく、大学や教員が適切なサポートを提供しながら、自律的に学べるよう訓練しなければならないのである。しかし、残念なことに、新任教員（少なくとも、これまで研究に専念してきた自分）にはそのための経験とスキルがない。自律的学習の在り方は、学生らの個性に応じて変わりうるものであるから、教員はそれぞれの学生に適したサポートを提供しなければならない。これはなかなか難しいミッションであって、それ相応のスキルが教員には求められることになる。

やや前置きが長くなってしまったが、第35回初年次教育セミナーのテーマは、学生らの自律性を促進するためのアドバイジングスキルであった。学生らの個性を理解し、それぞれの「やる気スイッチ」を発見するには、何よりもまず学生と教員の間に信頼関係を築かなければならない。本セミナーでは、そのための4つの注意点（傾聴、観察、問いかけ、笑顔）、4つのテクニック（あいづち、うなずき、ミラーリング、アイコンタクト）、および4つのスキル（繰り返し、言い換え、共感、褒める）をご教示して頂いた。これらの中には自然とできていたものもあるが、意識しないと実施できなさそうなものもある。単に知識を教示するだけの辞書的な教員にはとどまらずに、学生らの自律的な学びを支援するファシリテーターとしての役割を担えるよう、経験を積みながら、これらのスキルを修得していきたいと思った次第である。

第35回 初年次教育セミナー 参加報告

参加者
からの声

人間環境学部助教 城野 哲平



本セミナーは、「学生が自律的に学ぶために」という統一テーマのもと実施されたもので、崇城大学総合教育センターの宝来華代子准教授によって、学生に対するアドバイジングスキルや、自律的に学習させるために活用できる対話スキル

が紹介された。

学生はこの2年間、新型コロナウイルス感染症の影響によって、大学にて対面授業を受けられない、友人関係を育めないといった非常に孤立化しやすい環境におかれており、その状況は21年度末の現在においても大きく変化していない。20年度より本学に赴任した私自身もまた、コロナ禍の影響で学生と直接交流する機会が限られたままであり、学生の学習状況の理解について課題があると常々感じていた。そのような状況下で、学生との慣れないZoomによる対話において、あるいは今後の対面による対話において、学生の学習状況を適切に把握するとともに、その学習をより効果的にエンカレッジするための手法を学ぶことを目標として本セミナーに参加した。

冒頭では、「自立」と対比するかたちで「自律」の意味が紹介され、アドバイザーの役割が、教えることではなく、学びを促進させることによって、自発的積極的に学習に取り組む自律学習者を育成することと位置付けられた。適切なあいづちやミラーリングなどの心理学的スキルや、言い換えや共感、褒めるなどの対話スキルが具体例とともに紹介され、学生と信頼関係を築き、自律的に学習するためのサポートをするための対話のコツについて、参加者同士のペアワークを交えるかたちで紹介された。

本セミナーのテーマは学生との対話手法についてではあったものの、自律学習を促す試みとそのスキルは、学生指導における対話だけではなく、プロジェクト型授業の実践などにおいても有用だろう。課題解決のための道筋を学生自身に見つけさせることを念頭において、授業のなかの個別の声掛けや対話を行っていききたい。どうやれば自律学習を促せるかといった実践方法については、しっかり習得できたとは言い難い部分が残るものの、学生とのコミュニケーションや学生に対するアドバイジングについて多くの気付きを得ることができた。コロナ禍は相変わらず見通しが立たない状況ではあるものの、得られた知見を有効活用することによって、対面・非対面どちらにおいても学生を効果的にサポートできる対話を心がけたい。

LSC ドキュメンタリーアワー報告

第72回 町工場経営者から学んだ「強み」

商学部教授 木村 弘

今回は、NHK の名番組『プロフェッショナル 仕事の流儀』から、町工場経営者・竹内 宏 氏の内容をもとにして構成し、町工場の「強み」について参加者の皆さんと一緒に考えていきました。

ご存じの方も多いと思いますが、企業数では日本の99.7%は中小企業です。2016年時点のデータでは、大企業を含めた全企業数358.9万社のうち、357.8万社が中小企業なのです。実に多様な企業が存在しています。その中でもユニークな取り組みをする中小企業は話題になり、経営者に注目が集まることが多いです。今回は「プラスチック成形」という得意分野で、他社にはない画期的な成形機の開発に成功した中小企業の事例でした。

番組の終わりに、竹内氏は「プロフェッショナルとは？」という問いに対し、「**こびないこと**」「**群れないこと**」「**属さないこと**」「**やめないこと（あきらめないこと）**」をあげていました。これらの言葉は自社製品による経営を行う中小企業にとって大変重要な言葉になります。「こびない」といっても偏った意味ではなく、プライドを持って自分たちの仕事に取り組む姿勢のことです。「群れない」も、他社となれ合いの関係になって成長を忘れてはならないという前向きな姿勢です。「属さない」も同様に、安定した下請企業のようなポジションにいと、いざというときに経営が行き詰まることを防ぐための戒めの言葉です。「やめないこと（あきらめないこと）」は、それこそ寝ても覚めても独自の製品開発を成功させてやるという気迫を感じさせる姿勢のことです。

ここで気を付けておきたいのは、竹内氏は「仲間」「取引先」「家族」など周りの人々を大切にしていたことです。いろいろなアイデアを出すために、異業種の仲間たちとの交流を大切にしていたり、時間をかけてアイデアを練ったり、家族と遊んだり、創造的な仕事をするための工夫をされていた。「こびない」「群れない」「属さない」という言葉は、他を排除するのではなく、「**独創力こそ、工場の誇り**」という経営に対する考え方に基づいたものです。労を惜しんで易きに付くことが後々良くないことを、経験から学ばれていたのです。小さな分野でも徹底して究めることによって「強み」は生まれていました。今回のドキュメンタリーアワーでは、こうした内容を皆さんと共有できたと思っています。

第73回 「Judgement」を通じて

法学部助教 松本 奈津希

今回のドキュメンタリーアワーでは、BBC の『生と死刑のはざま』に収録の「Judgement」という作品を通じて、死刑と裁判員制度について参加者に考えてもらいました。本作品では、アメリカで起きた8人の大量殺人事件について、証拠品の回収や現場検証が不十分で動機も不明のまま、状況証拠のみから判断を下さなければならない陪審の苦悩が浮き彫りにされています。そしてそこには、人の命を奪う「死刑」の重みが付いて回ります。そこで、①日本の裁判員制度について、陪審・参審制との比較を交えながら解説をしたうえで、②陪審員になったと想定して、参加者に動画を鑑賞してもらい、③ディスカッションを通じて、被告人にどのような判決を下すべきかを考えてもらいました。

ディスカッションでは、多くの参加者グループが被告人を「無罪」にすべきという結論に至る中で、最後まで「有罪」「死刑」という選択肢を手放さなかった少数グループの意見を聞いたことは、私を含む全員にとって非常に有益だったと考えています。なお、実際にこの案件に対しては、「有罪」だけでも「死刑にはしない」という判断がなされています。なんだか少しズルいような気もしますが、もしもこの裁判が、裁判員が量刑判断まで行う日本の裁判員裁判であれば、そのような判決を下すことは難しいでしょう。

さらに、死刑に対しては、賛成／反対それぞれの主張が対立しています。そこで今回は、死刑制度とその執行方法（絞首刑）について、憲法論の観点から説明を加えました。というのも、憲法は生命に対する権利を定め（憲法13条）、それを手続的側面からも保障しています（憲法31条）。そして何より、残虐な刑罰は絶対に禁止されているのです（憲法36条）。条文だけを見ると、死刑は憲法に違反するのではないとも言えそうですが、最高裁判所が死刑を違憲としたことは一度もありません。論点を絞っての解説ではありましたが、死刑制度について考える際のポイントとその難しさが、一人でも多くの参加者に伝わっていれば幸いです。

「死刑」はその存在自体が、良くも悪くも人の興味を引き立てるものであると思います。実際に今回の企画にも、沢山の方々が参加してくださいました。死刑と裁判員制度について、少しでも考えるきっかけになれば嬉しいです。



LSCドキュメンタリーアワー —— 参加者アンケート紹介 ——

■ LSCドキュメンタリーアワーとは

学習支援センターでは、「LSCドキュメンタリーアワー」を開催しています。

「LSCドキュメンタリーアワー」とは、本学の教員が自ら選んだドキュメンタリー映像を、教員の解説と共に視聴する企画です。授業とは異なる問題に対する教員のアプローチに触れられ、また、教員の体験や研究を基にした興味深い話も聞ける機会になっています。教員の解説と質疑応答、ディスカッションの時間も設けられており、学生にとって印象に残る企画です。

2021年度はドキュメンタリーアワーを2回実施しました。各回、以下のテーマで行っています。

2021年度 LSCドキュメンタリーアワー

第72回 7月2日 「町工場に学ぶ中小企業の強み」

第73回 11月16日 「Judgement
— あなたなら、死刑判断を下しますか? —」

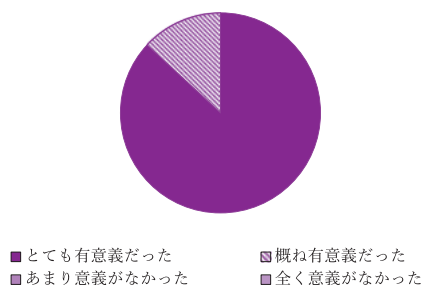
2021年度は、学生延べ45名、教員3名、職員13名の合計61名の参加がありました。

■ 参加者アンケートの紹介

各回終了後、参加者アンケートを実施しています。ここで、2021年度のアンケート結果を紹介します。

アンケート項目「本日のイベント全体の感想を教えてください。」に対して、「とても有意義だった」86.9%、「概ね有意義だった」13.1%という回答になっています（グラフ1）。全員が有意義であるという結果となりました。

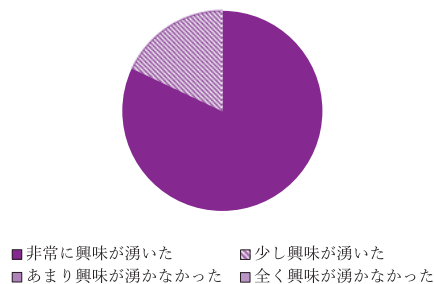
グラフ1 2021年度LSCドキュメンタリーアワーの感想



項目「ドキュメンタリーアワーの内容について教えてください。」に対しては、「1非常に興味を湧いた」82.0%、「少し興味を湧いた」18.0%という回答になっています（グ

ラフ2）。参加者全員がドキュメンタリーアワーのテーマに対して興味を湧いたという結果となりました。

グラフ2 本日のLSCドキュメンタリーアワーの内容



このような好意的な回答の理由はアンケート自由記述欄にも表れています。「自分の知らない知識、分野について新たに知ることができ、一つの観点を知れたという点においてとても有意義なイベントでした」といったように、新たな知識を得られたことはもちろんのこと、「自分でのリサーチでは限界があり、今回専門の先生のお話やドキュメンタリーから考えることができ、良い機会になりました」など、教員の解説を聞いて参加者が新たな観点から物事を見られたことが、好意的な回答になった理由だとうかがえます。さらに、「自身の学びのヒントになりました」という回答から新たな発見があったことや、「自分とは世界が違う話だと思っていましたが、いざ知ってみると自分の生活の中でも生かせるような教訓が沢山ありました」、「裁判員制度に参加する可能性がある中で、どのように判断すべきかという事を考えることが出来ました」という記述からは、参加者が問題を自身に引き付けて考えることができたことがうかがえました。先生方が意識されていた、参加者自身も考える機会にすることが実現できていたとわかります。

以上のように、各回とも参加者が多くの気づきを得る機会になりました。視聴したドキュメンタリー映像が単なるエンターテインメントとしてではなく、知的好奇心をくすぐるものとなっています。

最後に、項目「今後もこのような企画に参加したいですか」に対しては、参加者全員が次回の参加に前向きな回答となっています。しかし、「どこをみたら告知のスケジュールがわかるのか知りたい」、「看板（チラシを拡大したものでも良い）を作成し、協創館入口に張り出すのはいかがでしょうか」という回答もありました。学習支援センターとしては、内容はもちろんのこと、企画の情報が届くよう宣伝にも力を入れていきたいと思っています。

2022年度も充実した内容をお送りしていきますので、皆さまどうぞご参加ください。

第11回

教育力アップセミナー

参加者
からの声人材育成教育
の大切さ

健康科学部助教 黒飛 知香



今年の4月より広島修道大学に専任教員として着任いたしました。大学教員になる前は、食品企業で研究業務に従事しておりました。企業での他部署向けの人材育成教育も担当しておりましたが、やはり大学での教育とは異なる部分が多く

あります。さらに、昨年より続いているコロナウイルスの影響もあり、当たり前でできていたことができない環境下のため、着任後は授業の準備や方法、レベルなど不安に思いつつも試行錯誤する日々でした。

このような状況の中で今回の教育力アップセミナーに参加できたことは、とても有意義で多くのことを学ばせていただきました。

セミナーでは、アクティブラーニングについて学び、さらに教育する上での悩みや課題についてのディスカッションを行いました。まず、アクティブラーニングが産業界からの「積極的で即戦力のある学生」を望む声から始まったと聞き、企業時代を振り返って納得いたしました。このようなニーズに応えるためにも、社会で活躍できる人材育成を念頭に教育を行うことの重要性を改めて感じました。そのためには、教員のみならず、学生自身が積極的に取り組む姿勢も重要です。しかし、日々授業をする中でやる気のない学生の対応や学生の集中力維持などをどうすれば良いかなどの課題に直面していました。新しい環境でもあり、一人で悩んでいましたが、今回のグループディスカッションなどを通じて、お互いに課題や提案などを出し合っていくうちに、専門や学部など関係なく、多くの人と悩みが共通であることが分かり、緊張がほぐれてリラックスした状態でセミナーに参加することができました。さらに、様々な視点で気づきや提案などを出し合い、それぞれのメリット、デメリットも整理することで授業の方法や難易度の設定などのヒントや改善案などたくさん得るものがありました。また、日頃なかなか接点がない教職員の皆様との交流もでき本当に良かったと思っています。ありがとうございました。

最後になりますが、今回のセミナーで学んだことを今後の教育に活かしたいと思います。

アクティブラーニング
の重要性

教学センター 村上 翔平



「教育力アップセミナー」という今回のセミナー名から、職員が関与することができる範囲は狭いのではないかと考えましたが、全くそうではなく、各部署がそれぞれの「教育課題」を持ち、課題に対して取り組まなければならない点が多

くあることを認識しました。更に、課題解決には部局間連携や教職協働の視点が不可欠であることを学びました。

セミナーの冒頭で、森河先生に「大学がおかれた状況や本学の特長」「アクティブラーニング手法」のご説明をいただき、グループワークをする上での前提知識をご教示いただきました。

グループワークでは、まず、参加者それぞれの立場における「教育課題」を考え、キーワードを画用紙に書きました。そのキーワードに興味を持ったメンバーと4人の小グループを作り、教育課題を共有しながら、課題への対応方針を検討しました。次に、大きな模造紙にそれぞれの課題と、議論の中で出てきたキーワードを数多く書くというアクティブラーニングの手法を取り入れました。

また、例えば同じ「コロナ禍における非対面授業受講環境」という課題に対し、教員の「どのような課題・成績評価にするか」や職員の「学生サポートの方法はどうするか」というアプローチ方法の違いはもちろんのこと、教員間でも専門分野や講義方法等の違いによりそれぞれが抱える課題が異なっていることが印象に残りました。教員だけ、職員だけで解決できない問題も数多くあり、それぞれの目線だけで判断するのではなく、部局間連携や教職協働の視点をもって課題に取り組むことの重要性を再認識しました。

今回の教育力アップセミナーでは、アクティブラーニングの手法を取り入れた形で、対面実施したからこそ活発な議論が可能となったと思います。他の参加者の発言や模造紙上のメモから共通点や繋がりを発見し、浮かんできたアイデアもありました。新型コロナウイルス対策を十分に講じながら対面でのセミナーを開催いただいた学習支援センターの皆様、そして、各自の教育課題と対応策をご披露いただいたセミナー参加者の皆様、貴重な体験をさせていただきましてありがとうございました。

ありのままの自分で語れる場

ようこそ修大ディベートクラブへ！

—— わたしたちのこれまでとこれから ——

ディベートと聞くと、「攻撃的な話し方」「相手を言い負かす」ような討論を思い浮かべる方もいると思います。しかし、本来は複数の立場から特定のテーマに関して公の場で討論し、第三者の理解を得る議論を指します。ディベートを通して、批判的・論理的思考力、構成力、話す・聞く力を鍛えられることができるため、教育現場でも社会においても注目されています。

まなびコモンズでは、スタディグループという継続的なグループ学習を行っています。今回は、学生主体で活発に活動しているディベートクラブを紹介します。

ディベートクラブとは

現在のディベートクラブは、学習支援センターのスタディグループの1つとして、2019年の夏に結成しました。学年や学科関係なく活動する、和気藹々としたクラブです。

普段の活動はディベートの基礎的な知識を学ぶことや、プレゼンの練習などです。そして、パブリックディベートを開催したり、大会に参加するなどして、ディベートを実践しています。ディベートは話すことが主に見られがちですが、相手の主張を理解するための傾聴力も非常に大事で、私たちはその力を大切にしています。

【クラブの歩み】

2019年 8月	ディベートクラブ発足 発足当時 4人
2020年 7月	第1回パブリックディベート開催
8月	第9回国際日本語ディベート講座参加
12月	第18回 JDA 九州ディベート大会に参加
2021年 2月	第2回パブリックディベート開催
6月	第3回パブリックディベート開催
12月	第19回 JDA 九州ディベート大会参加 準優勝
2022年 1月	現在、12人で活動中

第19回 JDA 九州ディベート大会に参加して

2021年12月12日、ディベートクラブから2チーム6人で第19回 JDA 九州ディベート大会に参加しました。今回の議題は、「日本は国会を一院制にすべきである」というものでした。様々な論点を考え、証拠資料を集め、主張を考えました。主張でカウンタープランという新しい案を提示することもでき、クラブでは否定側で直接民主制を導入する案を考えました。

相手の主張が始まると力不足な面を意識せざるを得ませんでした。証拠資料が足りなかったこと。主張がうまくまとめられなかったこと。時間一杯話せなかったこと。しかし、大会に向けて一緒に主張を考えてきた心強いメンバーと日々相手からの反論を想定してどう返すか話し合っていたからこそ、臆することなく最後まで楽しくディベートをすることができ、準優勝することができました。

試合後、ジャッジの方から丁寧な評価とアドバイスをいただきました。その中で印象に残っている言葉があります。「ディベートは主張の中で何を大切にしたいかという思想のぶつかり合い」「ディベートは話し合いをするための準備」これはディベートをすることで相手の大切にしている考えを理解し、話し合いをするための準備ができるということです。ディベートには勝敗があり、主張に対する鋭い指摘が行き交います。そのため、ジャッジからの話を聞くまで、話し合いに繋がるものとは思っていませんでした。しかし、大会に出て真剣にディベートをしたからこそ、ジャッジの方の言葉の意味を理解できました。

今後は、堂々と主張したり、相手の主張を理解し、まとめながら話すことができるよう、このディベートクラブとともに成長していきます。さらに力をつけて、より良いディベートに臨みたいです。

メッセージ

▶高尾紗弥（英語英文学科 4年）

みんな最初は初心者から。ディベートを通じて私は多角的な視点を持つことができました。素敵な仲間にも出会えました。そんなディベートに感謝。

▶渡邊伊織（英語英文学科 4年）

お互いを尊重し本音で語り合える場所です。学部・学年を超えて1つのテーマを議論できる貴重な時間でした。

▶吉本絢（英語英文学科 4年）

まじめなことを笑わず聞いてくれる人がいる。心を開いて自由に話せる環境がある。ディベートクラブはそんな場所です。

▶小林薫（教育学科 4年）

日常的に相手の立場に立って物事を考えることが増えました。自分と異なる価値観や意見を持つ人とも、まなびコモンズでなら出会えます。踏み出せ一步！

▶村上愛佳（教育学科 4年）

自分の意見を自信をもって相手に伝えられるようになりました。色んな考えをもつ人たちと出会えた場所です。

▶楠啓史（英語英文学科 3年）

授業では扱わないような幅広い社会問題を、自主的に調べて議論しあえる場所なので、重宝してます。

▶近久和紀（国際政治学科 2年）

愉快で個性的な人々が数多く所属しており、大学の中で新しい交流の場を求めている人にはとてもお勧めできる場所です。

▶樋口慧（人間関係学科社会学専攻 2年）

自分の意見を発言することが苦手。でも、将来的に必要なだから練習しておきたい。そんな人におススメです！！

▶白井佑汰（心理学科 2年）

何か直接言葉をもらったり、手助けをされなくても、私にとってディベートクラブはその場の空気感に癒される場所です。

▶坂本光里（人間環境学科 2年）

コミュニケーション能力や熟慮する力といった、色々な力が手に入る…ディベートクラブはまさに“力の宝宝箱”や！

▶青江晋作（人間関係学科社会学専攻 2年）

ディベートでは主張に対する証拠資料を集めるため、レポートを書く時にも必要な情報収集能力を身に付けられました。



学生たちの学び



学生たちの学びのスタイルは様々です。学習支援センターでは、ワークショップ、スタディグループ、個別の学習相談などの方法で、学びの機会を提供しています。コロナ禍の学生生活の中でも、それぞれのサポートを得ながら成長を続けている学生達を紹介します。



英語学習のはじめの一步

人文学部 英語英文学科 2年
宮本 晴基

私が多読のワークショップに参加しようと思った経緯は英語学習のモチベーションを上げるためです。英語の勉強が苦手な自主学習、授業でさえも真面目に取り組んでいませんでした。しかし、英語英文学科に入ったからには TOEIC や英検で結果を残したいという気持ちはありました。そこで私は読書を通して、少しは英語が楽しく学習できるのではないかと考え、多読のワークショップに参加してみました。そこでは、読書をする際、自分に合った場所、時間帯など、多読を始めるための環境づくりの話から始まりました。毎日続けること、自分に合ったレベルの本を読むこと、疲れている日は10分だけ読むなど、その日の調子に合わせ、読むペースを変えていくといったことが重要だと学びました。最初の1週間は慣れるのに大変でしたが、毎日続けることで苦ではなくなり英語学習のイメージも変わってきました。自分を変える一歩をワークショップで踏み出すことができました。



楽しく 身につく ワークショップ!

人間環境学部 人間環境学科 2年
坂本 光里

私が初めてワークショップへ参加したのは、大学2年生の前期にたまたまポスターを見たことがきっかけでした。その時のテーマは「論理的な文章の書き方」でした。テーマは難しそうでしたが、説明はとてもわかりやすく、終始楽しい気持ちで学ぶことができました。ワークショップは立ち寄る感じで、気軽に参加できるので、時間が合えば参加するようになりました。その中でも印象に残っている講座は、「レポート提出直前講座」です。当時の私は、レポートの書き方を十分に把握できておらず、また、伝わりやすい文章が書けないことに、とても悩んでいました。しかし、この講座に参加してから、論理的に文章を書くコツがわかり、以前よりレポートをわかりやすく書けるようになりました。

このように、ワークショップは学習に必要な基礎力を気軽に身につけることができるので、どんな学生にもオススメです。共に楽しく学習力を手に入れましょう!

ワークショップ



仲間と一緒に成長できる

商学部 商学科 3年
山本 堪太

僕が TOEIC 対策のワークショップに参加したきっかけは、友達から誘われたからです。当時の僕は TOEIC の点数が思うように伸びていませんでした。参加する前は「ワークショップに参加したくらいで点数は上がらない」といった思い込みや、「僕みたいに英語が苦手な人が参加してもいいのだろうか」というような不安を抱えていました。しかし結果的に、ワークショップでの経験は本番のテストにも役立ちました。特にパートごとの解き方や時間配分などの解説は、自分一人では気づけないものが多かったです。指導も丁寧で、コミュニケーションを上手にとれない自分にも優しく教えてくださいました。参加していたメンバーも英語が得意という人ばかりではなく、むしろ僕のように英語が苦手だから上達させたいという人が多かったように感じます。ワークショップには向上心溢れる学生が集まるので、英語が苦手な人も得意な人も関係なく、多くの人に経験してほしいと思います。



大学で必要な力が学べる場所

国際コミュニティ学部 地域行政学科 1年
木下 智文

私は、入学時に学習支援センターからの案内を見て、興味のあるワークショップに参加するようになりました。

ワークショップは非常に分かりやすく、特にレポートに関する講座で学んだことは日々の学習に活かしています。レポートで使える言い回しを使って、適切な表現でレポートを書くよう心掛け、逆に、適切でない表現は使わないように気を付けています。入学したての頃は、書いたことがないレポートに戸惑いましたが、書き方を教わったことで格段に書きやすくなりました。

また、ワークショップで一番感じたことは、学習アドバイザーの方がいつも優しく教えてくださることです。その場で質問もできるので、充実した時間になります。

ワークショップは、大学での学びを支える基盤になるものだと思います。ここには紹介できなかった講座もあるので、ぜひ参加して、大学で必要となる力をつけてください。



学びのモチベーション

商学部 商学科 2年
角田 和哉

私は、月曜日の時事英語に参加しています。参加しようと思ったきっかけは、高校生の時、一緒に勉強する友人たちと互いに切磋琢磨することで楽しく英語を伸ばせた経験があり、一緒に勉強できる人を探すことはとても重要だと感じていたからです。大学では非対面授業が多く、またサークル活動ができないことから勉強仲間をなかなか見つけられない状況にありました。そこで目にしたのが学習支援センターのスタディグループです。最初は入りづらさも感じていましたが、利用してみるとそんなことはありませんでした。同じように勉強している学生をみて頑張ろうという気持ちが湧き、少し勇気をもらいます。時事英語では日々のニュースを聞いたり、新聞記事を読んでいます。ニュースなので興味をそそられやすく、時事に関連した語彙なども学ぶことができます。スタディグループの良いところは、「勉強」だと身構えることなく気楽に利用できる点だと思います。



序論が書けるとレポートが書ける

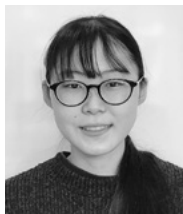
経済科学部 経済情報学科 2年
原井 颯汰

私は、文章を書くことが苦手で、レポート課題の評価が低いため、レポートを速く正確に書けるようになりたいと思い、「レポートに使える！ 便利な表現」というスタディグループに参加しました。このスタディグループでは、レポートを書く際の適切な表現や、レポートの構成などを学びました。

私は今まで、レポートを書く際に書き初めに苦労することが多く、レポート課題に取り掛かるのに時間がかかっていました。しかし、このスタディグループで論文の序論の構成要素を学び、大きな話題から問いへと話題を絞っていくという序論の書き方を覚えたことで、レポートが書きやすくなり、レポート課題に取り組む時間を短縮することができるようになりました。また、学んできた表現技法やフレーズ、引用の仕方をを用いることで、以前よりも違和感のない正確な文章が書けるようになりました。

レポートの書き方が分からない方やレポート課題に時間がかかる方は、ぜひ学習支援センターを利用してみてください。

スタディグループ



スタディグループで学んだ〇〇

人文学部 教育学科 2年
山田 美織

夏休みに、スタディグループで、敬語について学びました。一人で学ぶより話を聞きながら学びたいと思い、参加しました。敬語のスタディグループに参加した理由は、正しい敬語を学びたかったことと、メール作成に生かしたいと思ったからです。参加する中で、実際の場面を想定した敬語の使い方や種類を学びました。

スタディグループに参加し、学んだことで敬語の知識が増え、使えるようになってきたと実感しています。また、敬語の選択に迷う時間が減り、メール作成を短時間でできるようになりました。さらに、長期休みで崩れがちな生活リズムも毎週参加していたことで、安定していたように思います。そのため、後期が始まってからもスムーズに生活が送れました。

スタディグループのような継続的な学習は、じっくり学びたい人にもオススメです。学習支援センターは、何か学習に対して不安に思っている人を支えてくれる素敵な環境です。



私の TOEIC 学習

国際コミュニティ学部 国際政治学科 2年
松廣 理沙

私が TOEIC のスタディグループに参加しようと思ったきっかけは、友達との会話でした。参加する前は、友達が行くのだったら私も行ってみようという気持ちでしたが、今は1人でも行ける時は行き、TOEIC の勉強を頑張っています。この TOEIC のスタディグループは、普段の授業と比べ少人数であるため、疑問に思ったことをためらわずに、すぐに聞くことができます。時間は30分と短いですが、毎週解く時のポイントをパートごとに教えてもらったり、文法やボキャブラリーの確認ができたりと充実した時間を過ごすことができています。また、学部や学年関係なく様々な方が参加しているため、私自身参加している方からも刺激を受け、家での英語学習のモチベーションに繋がっていると感じています。お昼休みに気軽に勉強できるので、TOEIC の勉強をしたいけど、部活やサークル、バイトなどでなかなか時間がとれない人や、1人では集中して勉強できない人に特におすすめです。



私と学習支援センター

人間環境学部 人間環境学科 4年
安積 大輔

私が学習支援センターを本格的に利用し始めたのは、3年生からです。英語の課題が出されたとき、一人で取り組むのは難しいと思い、利用し始めました。そんな些細な理由ですが、当時英語の担当だった学習パートナーの是澤さんには、英作文の書き方から TOEIC の攻略法まで丁寧に指導していただきました。また、英語の現学習アドバイザーである谷岡さんには、TOEIC の演習や、英語の質問などにも対応していただき、徐々に英語学習に打ち込むきっかけを作っていただきました。

学習支援センターは「学びに行き詰まった」、「この課題はどう取り組もう」、「学習方法を身に着きたい」という方には是非利用して欲しい場所です。そこには、親身になって相談に乗ってくれる学習アドバイザーや親しみやすい職員の方々がいます。学習にとことん打ち込める環境があります。学びを求めている学生にとっては最適な場所です。小さなことでもいいので学習で困ったら利用してみてください。



大学生活で困った時に 相談できる場所

経済科学部 経済情報学科 2年
弘中 慧

私ははじめ、スタディグループの一環である「レポートに使える！ 便利な表現」という活動に参加しました。自分がレポートを作成する上で分からない所を質問すると学習アドバイザーが親身になって答えてくれたり、毎回学生にとっても気さくに話しかけてくれたりしたおかげで楽しくレポートについて学ぶ事ができました。その活動がきっかけで、レポート課題などで困った時によく学習相談をするようになりました。最近ではゼミナールの選考で提出する志望動機などの申込書について相談に乗って頂き、申込書に適切な文章表現の仕方、さらには自分が本当に書きたいことを整理するために話し合い、自分が納得のいくまで手伝って頂きました。結果、第一志望だったゼミナールにも合格することができました。それだけでなく学習相談を利用したことで、レポートを書く際、以前ほど不安にならずに自信を持って取り組めるようになりました。もし大学の試験勉強やレポート課題について悩んでいる方がいたらぜひ学習支援センターの学習相談を利用してみてください！

学習相談



時間管理の大切さ

人文学部 教育学科 3年
守谷 諒

私は、学習支援センターの利用を通して、時間管理の大切さを痛感しました。大学3年生から公務員試験の勉強を始めましたが、大学の授業を優先していたため、なかなか公務員試験の勉強に手が付けられずにいました。そこで学習アドバイザーに時間管理の方法について相談することとしました。

学習アドバイザーにアドバイスしていただいた通り、大学の授業、課題、アルバイト、公務員講座などの予定をスマホのカレンダーに細かく記入し、同時に、1日に自分がどのように過ごしているのかをスマホのメモ帳に細かく記録を付けるようにしました。この2つを繰り返しているうちに、課題をこなすのに適した時間帯、場所を見つけることができるようになりました。時間管理がうまくなると、効率よく課題等を終わらせることができ、1日の時間が増えたような感覚になりました。まだ課題はありますが、仕事をする上でも非常に重要な時間管理を大学生のうちに身に付けることができてよかったです。毎週、時間管理の相談にのっていただき、ありがとうございました。



やり方次第で輝く自分に

健康科学部 心理学科 1年
山下 桃佳

私は学習支援センターでの学習相談を通して、自分に合った勉強法を見つけられました。

私はもともと TOEIC の勉強が大の苦手でした。試験日の1週間前になって1日数時間も公式問題集を解くという荒業で試験に望んでも、結果は良くはなりませんでした。そんな時、思い切って学習支援センターで学習相談し、TOEIC の勉強をまずは1日15分続けようと提案されました。私は15分という手軽さから、毎日勉強が続けられるようになり、30分、1時間と時間を増やしていくことができました。結果、4月は600点だったスコアを10月には800点まで上げることが出来ました。短い時間でも毎日続ける方が私には合っているのだと気づき、今では TOEIC の勉強、授業、課外活動も楽しんでいます。

勉強で悩んでいる人は努力が足りないのではなく、「やり方」を知らないだけかもしれません。一度学習相談を受けてみてください。それが輝く自分への第一歩です！

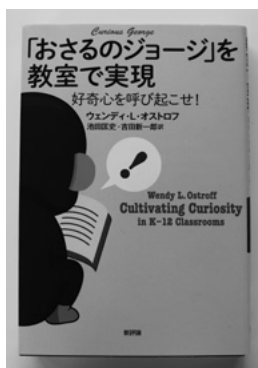
LSC資料紹介

学習アドバイザー 谷岡 亮

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター（協創館1階）までお問い合わせください。

『「おさるのジョージ」を教室で実現 好奇心を呼び起こせ!』

ウェンディ・L・オストロフ著 池田匡史・吉田一郎訳／新評論(2020)



「おさるのジョージ」をご存じでしょうか。もともとは『ひとまねごさる』という絵本シリーズですが、2007年からNHKのEテレでテレビアニメとしても放映されています。小さなおさるのジョージは好奇心旺盛で、いろんなことを体験してみたいのですが、社会的なルールを理解していないので、

よくトラブルに巻き込まれてしまいます。ジョージが厄介なトラブルに巻き込まれた際は「黄色いぼうしのおじさん」が助けに来てくれる、そんなストーリーです。

ウェンディ・L・オストロフ著、池田匡史、吉田一郎訳『「おさるのジョージ」を教室で実現』（新評論、2020）は好奇心に満ちた教室づくりの重要性とそのノウハウを紹介し、生徒たちをより深い学びの探求へ導くことを提案しています。

第1章ではまず好奇心と学習について説明しています。好奇心は人間が学習し、成長する過程の中心にあり、学習者は好奇心が活性化されると、より多くを学び、学びの質も向上するとしています。それゆえ、教師は知識や方法を押し付けるのではなく、積極的かつ自発的な探求を促すことで学習効果が高まると説明しています。

第2章では学びを自律的で苦にならないものにするについて説明しています。子どもは選択肢が少なすぎるとやる気が損なわれる可能性があり、効果的な学習環境を作るために、生徒は自分が何をし、どのように時間を過ごすのか日々一定の意思決定を行う必要があると述べ、時に縛られない時間を設けたり、生徒に学習内容や方法をデザインさせてみることで生徒はより好奇心を持ち、楽しい学びになるとしています。

第3章は内発的動機付けについて説明しています。行動科学者によればモチベーション（動機づけ）なしに学習することはありえず、子どもの内発的な動機を大事に

すべきだと説明しています。ところが、現在の学校教育は成績評価、教師や保護者に褒められたいなど外部からの承認または報酬によって作り出された動機を誘導し、子どもの内発的な動機を損なう傾向にあるとしています。

第4章では想像力は、すべての創造性とイノベーションの根底にあり、子どもの発達のために重要な営みであるとしています。想像力は、直接的な経験を必要とせずに生徒の知識を広げたり、様々な視点から考えること、柔軟性などの認知領域を成長させることができることから、構造化せず、自由を与えることで創造的なアイデアが生まれる環境づくりを推奨しています。

第5章では授業内で質問することで、生徒は自身の思考を発見し、構成し、明確にすることができるとし、さらに質問することで深く学習に取り組み、複雑な概念やアイデアの内部操作を促進することができると説明しています。学校では、教師が質問することが多いため、質問の仕方を教え、生徒からの質問を促すことを提案しています。

子どもの脳の注意システムは短い時間で学習する事柄が次々と移り変わるとストレスを感じる場合があります。第6章では、必要に応じ教師は計画から逸脱するなど、柔軟に学習者を育むことを意識し、空想、想像、落書きなどの他愛もない時間は好奇心のサポートになり、活動中における集中状態を生むためにはこどもたちを急かさなような時間管理を提案しています。

第7章では、好奇心に満ちた教室を作るためには細胞のように区分され、チャイムだけ聞こえるような学校のイメージを転換する必要があるとし、授業内容にあった生徒の配置を試したり、様々な種類の椅子を使うなどの工夫に加え、自然光に触れる機会が多い教室で学ぶ生徒は標準テストの点数において26%上回っていたと報告しています。

本書では授業で生徒の好奇心を促す工夫を様々な視点から具体を添えて紹介しています。授業の工夫を考えている先生や学生にとっても自身の学びの本質を考える上で参考になる1冊ではないでしょうか。

<学び★サブリ>

2021 Vol.21

出会い直しの読書

学習アドバイザー 斎藤 佳子

2021年末、遠藤周作の未発表原稿が発見されたというニュースが報じられました。遠藤は、カトリック作家として多くの作品を残すだけでなく、ネスカフェをはじめとしたCM出演などでお茶の間に姿を現し、広く親しまれた作家です。

遠藤の作品のなかで、最も知られているのは『沈黙』（1966年）でしょうか。『沈黙』のあらすじは次のようなものです。17世紀、キリスト教禁教下の日本にロドリゴという宣教師がやって来ます。キリスト教を信じる農民たちが拷問を受け、無残に死んでいく中で、ロドリゴも捕縛されます。棄教しなければ、代わりに農民を拷問し続けると言われ、苦悩の末に踏絵を踏み、その後、岡田三右衛門という名を与えられて生きます。

実は、この『沈黙』という作品は、出版前に『日向の匂い』と題されていました。出版前に原稿を読んだ編集者が、『日向の匂い』では「迫力がない」と、『沈黙』という題名を提案したのです。どこか冷たさを感じさせる『沈黙』とは対照的な、あたたかな印象の題名が予定されていたことに、驚く方もいるかもしれません。

<学び★サブリ>はまなびコモンズ掲示板でも読むことができます。

信仰をめぐる過酷な現実を描く『沈黙』は、多くの場合、人間の苦しみに対する神の沈黙を描いた作品として読まれてきました。ですが、この読み方には『沈黙』という題名が影響したと遠藤自身は考え、題名を変えたことを悔いていたようです。現に、『日向の匂い』という題名のもと、作品を改めて読み解いてみると、同じ作品であるにもかかわらず、この世界を生きる人間の上に、静かに、しかし、あたたかくふりそそぐ日差しのような神のまなざしを読み取ることができる物語として立ち現れます。『沈黙』という題名がついていたことにより見落とされていた作品の側面が、『日向の匂い』という題名によって浮かび上がったのです。

題名をはじめとした、作品に付随するラベルは、作品の内容をどのように理解するのかに影響を与えます。何度も丹念に読み直し、知らないうちに読み落としていたものを発見し、作品に出会い直すこと、そして、以前の読み方でしか読むことができなかった自分を見つけることが、読書の楽しみの一つかもしれません。

参考文献

『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』 山根道公（2005）／朝文社

大学教育学会

2021年度課題研究集会参加報告

学習アドバイザー 宮原 千咲

2021年11月27日、28日開催の大学教育学会2021年度課題研究集会に参加しました。基調講演、シンポジウム、ポスターセッションは全面オンラインでの実施でした。今大会の統一テーマは「学生が成長するための大学教育～新たな展開への挑戦～」であり、新型コロナウイルスへの対応に追われた後に、改めて大学教育の今後の展開を問うものになっていました。

今回は、シンポジウム「コロナ禍がもたらす大学教育の可能性～対象・方法・内容～」を報告します。このシンポジウムは、大学教育の可能性を対象・方法・内容などの面から多面的に検討するものでした。コロナ禍を経た新しい時代に対応する学習環境の設計や運営、評価のモデル構築に向け、今回は、コロナ禍以前と禍中の学習環境に関する調査、遠隔での学習支援に関する報告がありました。

ラーニングコモンズ(LC)に関する文献調査からは、キーワ

ードの拡張や内容の変化が報告されました。キーワードの拡張に伴い、研究内容はLC・学習支援の概念や北米など海外事例を対象とした調査研究、大学図書館のLC導入事例などから、設置後の利用実態やその分析に移っているとのこと。多くの日本の大学がLCなどの学習環境を整備し、運用していることがうかがえました。そして、コロナ禍のLCやライティングセンターにおいてのオンラインを活用した学習支援の工夫や、新しい仕組みやシステムを取り入れた対応事例の報告がありました。さらに、オンライン空間を使用した学習環境デザインの検討や、ニューノーマル時代の学習環境デザインのモデル化に向けた要素抽出が必要であると指摘していました。

これらの報告を踏まえ、指定討論者からは「大学教育における学習支援の位置づけをどう考えるべきか」という指摘がありました。確かに、一視点を重ねたのみでは大学組織として、どうデザインするか不明確なままであり、学習者の包括的な学びをデザインすることはできません。

では、広島修道大学の学習支援は、と。おそらく組織として大学がどう考えるか、から入っていかねばならないと思います。今後の大学教育のあり方について考える示唆的で、有意義なシンポジウムでした。

